

『日本靈異記』説話の伝達について

〈要 約〉

『日本靈異記』には上中下三巻に合計一一六の説話が収められている。説話のそれぞれに伝承され来った舞台があるが、それらの説話は、その舞台の地から、『日本靈異記』の著者とされる平城京の薬師寺にいた景戒の許へはどのようにしてもたらされたのであろうか。説話伝承の舞台の歴史的位置は、官道である七道に接するかそれに近く、郡内に国府・国分寺が所在する場合が多く、また、「市」など人や物・情報の集まる場所やその近郷が多い。説話の主人公は一般庶民よりも郡司など在地の有力豪族が多いといえる。説話の伝達者としては、そのような場所、そのような人々と接することの多かった「商旅（の徒）」や交易に関わる者であった場合が多かったのではないか。

〔キーワード〕…『日本靈異記』、七道、国府、国分寺、駅家、市、津、商

旅の徒、遠距離交易

塩 入 秀 敏
Shioiri Hidetoshi

はじめに

『日本靈異記』一一六の説話について、説話文学の立場からなされた研究はおびただしい数に上っているが、伝承されてきた説話を、とくに仏教色を取り除いて検討・検証すると、登場する地名や人物については歴史史料として使用に耐えうるものが多いとされている。しかし、説話がある程度史実を伝えている史料として用い、説話伝承の地と『日本靈異記』著者とされる景戒の許へ、どのようにして伝達されたのかについての研究はあまり多くない。もちろん、伝達の具体的な手段やそれを担った人物を特定することは不可能である。しかし、決して多くはない史料を援用しながら、その可能性や蓋然性を探ることは可能であると考えられる。

本稿では、説話伝承地と主人公の特徴や共通性を検証し、そこを平城京を結んで説話を伝達した者について考えたい。

I 説話舞台の特徴と共通性

『日本靈異記』所収一一六の説話には伝承され来った舞台がそ

れぞれにある。それを地域別に分けると、最も多いのが当時の都である平城京があつた大和で七九、以下畿内の国々がこれに続き、山背一二、河内一二、摂津一一、和泉八である。畿外では、著者とされる景戒の出身地と考えられている紀伊国が他の諸国と比べ圧倒的に多く二二で大和に次ぎ、他の畿内の国をも上回り、例外的である。これらの合計が説話数の一一六を上回って合致しないのは、一説話の中に出身地と活躍の舞台というように、舞台が複数ある場合があるからである。

景戒の地元である平城京をはじめ畿内の地域と、出身地である紀伊国からは、景戒への伝聞もされやすかつたと考えられるので、ここでは、これら畿内の国（大和・山背・河内・摂津・和泉）および紀伊国を除く国々に伝承されてきた説話の舞台を対象にして考えてみたい。

一 説話舞台の地理的歴史的特徴

畿外諸国を伝承舞台とする説話とその主人公・登場人物については次ページの表のとおりである（比定される現在の地名は、平成の大合併以前のものである）。

山陽道	五話（播磨一・美作一・備中一・備後二）
東海道	八話（伊賀一・尾張二・遠江二・武蔵三）
東山道	七話（近江二・美濃三・信濃二）
北陸道	二話（越前）
山陰道	一話（但馬）
南海道	六話（阿波一・讃岐三・伊予二）
西海道	三話（豊前一・肥前一・肥後二）

合計三二話である。一つの説話でも本稿の主題について考えるとき重要な地名が複数登場することがあるが、それらについても表に掲出しておいた。

（一）東海道

まず東海道八話の舞台をみてみたい。はじめ東山道に属していた武蔵国は、所属替え以前から東海道利用のほうが多かつたと考えられるのでこちらへ入れた。並べた順番は都に近い順にした。

①中巻第十五縁の伊賀国山田郡噺代里は現在の三重県上野市噺代あたりとされる。同話に登場するもう一つの地名、同郡御谷里は、阿山郡大山田村三谷あたりであり、噺代と三谷は直線距離で三竈に隣接する地で、ともに上野市街からはやや離れた布引山地中にある。『延喜式』東海道は近江国甲賀郡から伊勢国鈴鹿郡を通るので伊賀国は通らない。しかし、奈良時代の東海道は平城京より伊賀国を通り東海道諸国に通じていた。国の西端を流れる名張川（横川）は大化改新時には畿内の東端とされたが、伊賀国のすべての水流は最後に淀川となり大阪湾に流れ出ているように、布引山地より西を畿内としたほうがよいほどに伊賀国は畿内に向いて開かれている。それよりも何より、壬申の乱の際に東国に向かつた大海人皇子一行が通つた地であることから分かるように、大和と東国を結ぶ重要な地であつた。

②上巻第三縁の尾張国阿育知郡片瀨里は愛知県名古屋市中区にあたる。郡内を東海道が通り、近くに新溝駅があつた。新溝駅からは現在の稲沢市に所在した尾張国府への連絡路が出ていた。阿育知郡は愛智郡とも表記されるが、後に県名の愛知につながる重要な

『日本霊異記』畿外地方舞台の説話と主人公・登場人物

巻	縁	舞台地名	比 定 地	説話主人公・登場人物	主人公・登場人物の地位・行為
上	二	三乃国大乃郡	岐阜県揖斐郡大野町あたり		
	三	尾張国阿育郡片絶里	名古屋市中区		農夫
	七	備後国三谷郡	広島県三次市	禪師弘濟 三谷郡大領の先祖	造仏のため上洛し金・絵の具購入 三谷寺を建立。
	九	但馬国七美郡 丹波後国加佐郡	兵庫県美方郡美方町・村岡町あたり 京都府舞鶴市・加佐郡大江町あたり		
	十一	幡磨国飾磨郡濃於寺	兵庫県飾磨郡・姫路市あたり	漁夫	
	十七	伊予国越知郡	愛媛県越智郡	越智直	大領の先祖。建郡。造寺、造仏
	十八	伊予国別郡	愛媛県松山市	日下猿	家長。召使の女あり。堂を持つ
	二十九	備中国少田郡	岡山県小田郡・笠岡市あたり	白髪部猪丸	
	三十	豊前国宮子郡	福岡県京都郡・行橋市あたり	膳臣広国	少領。書承
中	三	武蔵国多摩郡鴨里	東京都拝島市又はあきる野市	吉志火麻呂	防人
	四	三乃国片県郡小川市 尾張国愛智郡片輪里	岐阜市 名古屋市中区	三野狐 力女	狐の玄孫。百人力 道場法師の孫。交易
	九	武蔵国多磨郡	東京都府中市あたり	大伴赤麻呂	大領。寺を建立
	十五	伊賀国山田郡蹴代里	三重県上野市喰代あたり	高橋連東人	大いに富んで財豊か
	十六	讃岐国香川郡坂田里	香川県高松市	綾君	富める人
	二十五	讃岐国山田郡 讃岐国鶴垂郡	香川県高松市 香川県丸亀市	布敷臣衣女 布敷臣衣女	疫神に賂い饗す
	二十七	尾張國中嶋郡 尾張国阿育郡片絶里	愛知県中島郡・一宮市・尾西市・稲沢市あたり 名古屋市中区	尾張宿禰久玖 女人（尾張宿禰久玖妻）	大領 大力。道場法師の孫
	三十一	遠江国磐田郡	静岡県磐田市・磐田郡あたり	丹生直弟上	塔建立を発願
	三十九	遠江国榛原郡鶴田里	静岡県島田市野田	僧	
下	七	武蔵国多磨郡小河郷	東京都あきる野市	正六位上丈部直山継	少領。征狄軍従軍。仲麻呂乱連座
	八	近江国坂田郡遠江里	滋賀県坂田郡	富める人	
	十三	美作国英多郡	岡山県英田郡	鉄山の役夫	
	十四	越前国加賀郡	石川県河北郡・金沢市・松任市・石川郡あたり	浮浪人の長 小野朝臣庭麿	府浪人を私的に使役
	十六	越前国加賀郡	石川県河北郡・金沢市・松任市・石川郡あたり	横江臣成刀自女	
	十九	肥後国八代郡豊服郷 肥後国託磨郡 豊前国宇佐郡 肥前国佐賀郡	熊本県下益城郡松橋町豊福 熊本県熊本市出水・神水本町 大分県宇佐市南宇佐 佐賀県佐賀市	豊服広公の娘 国分寺の僧 矢羽田の大神寺の僧 大領正七位上佐賀公児公	
	二十	粟国名方郡埴村 粟国麻殖郡	徳島県名西郡石井町あたり 徳島県麻植郡あたり	忌部首多夜須子 忌部連板屋	写経
	二十二	信濃国小県郡跡目里	長野県上田市・青木村あたり	他田舎人蝦夷	財宝豊か。銭・稲を出挙する
	二十三	信濃国小県郡娘里	長野県上田市・東御市あたり	大伴連忍勝	一族で氏寺建立
	二十四	近江国野州郡御上嶺	滋賀県野洲郡	僧惠勝	
	二十六	讃岐国美貴郡	香川県木田郡あたり	田中真人広虫女 （美貴郡大領従六位上小屋屋主宮手妻）	富みて宝多し。酒を売り、稲を出挙
	二十七	備後国鞆田郡大山里 備後国深津郡深津市 備後国鞆田郡窟穴国郷	広島県芦品郡・福山市・府中市あたり 広島県福山市あたり	品牧牧人 穴君の弟君 賊伯父秋丸	正月用の品を市に買いに行く 饌の共食、財物を授ける 馬・布・綿・塩を市で売る
	三十一	美乃国方県郡水野郷楠見村	岐阜県岐阜市長良あたり	女人（県氏）	
	三十五	肥前国松浦郡	佐賀県東・西・南・北松浦郡・唐津市	火君の氏の人	書承

地名である。片瀬里は片輪里との表記もあり、平城京元興寺の道場法師の出身地で、また道場法師の孫の大力の女が居住している地でもある。『日本霊異記』には三回登場する著名な地である。

③中巻第二十七縁の尾張国中嶋郡は現在の愛知県中島郡・一宮市・尾西市・稲沢市一帯にわたっていた。郡内に尾張国府が所在し、稲沢市国府宮町・松下町がその地に比定されている。尾張国は奈良時代直前ころまでは東山道に属していた可能性が高く、そのため国府は国域の北に偏して東山道近くに設けられたとされる。東海道に属してからは駅路から離れているため、馬津・新溝の両駅から国府連絡路が出ていた。道場法師の孫で片瀬里に住む大力の女が中嶋郡大領の妻になっている。

④中巻第三十一縁の舞台、遠江国磐田郡は静岡県磐田市および磐田郡にあたる。遠江国府は十世紀に移転したらしいが、新旧国府とも現在の磐田市内に比定されている。説話の主人公丹生直弟上は姓に直を有していることから、旧国造一族かそれに連なる家柄の人物であろう。塔建立を發願するが長年実現できなかったところを見ると、家柄は良くても富豪層であったとはいえそうにない。老齢におよび、国司の助力や民衆の知識により建立できた七重の塔が磐田寺の塔であり、遠江国分寺の七重の塔の建立縁起とする考えもあることから、丹生直弟上の居住地は磐田郡の中心地あるいはその近くと考えることができよう。

⑤中巻第三十九縁の遠江国榛原郡鵜田里は、現在も鵜田寺が存在する静岡県島田市野田に比定されているが、この地は大井川の北岸にあたり、駿河国に含まれる。古くはこの地が遠江だったか、あ

るいは寺自体が移されたか、いろいろに考えられているようだが定説はない、いずれにしても、東海道はこの里の南方のほど近くを通っている。

⑥中巻第三縁の武蔵国多摩郡鴨里は『和名類聚抄』その他の史料に見えない里名だが、東京都拝島市あるいはあきる野市をあてる説がある。多摩郡は武蔵国府および国分寺が所在する郡で、武蔵国の中心だった。武蔵国はじめは東山道に属し、宝亀二年(七七二)東海道に所属替えされた。説話の主人公が防人として派遣されていたのであるから、その時代は所属替え以前ということになり、説話の時代は東山道ということになる。ただし、天平勝宝七歳(七五五)に派遣された武蔵国の都筑・埼玉両郡の防人に足柄坂を詠んだ歌があり、武蔵国の防人は東海道経由で難波の津に向かったと推測され、所属替え以前から武蔵国は東海道利用が多かった。主人公の吉志火麻呂が防人に差点された年が分からないので、彼がいずれの道を通ったのかは不明である。

⑦中巻第九縁の武蔵国多磨郡は現東京都の中西部にあたり、国府は郡内の府中市に所在した。国衙は同市京所地区に比定されているが、同所には京所廃寺跡が残り、「多寺」「磨寺」の刻字瓦が出土していることから、この廃寺は多磨郡の郡名寺院であった多磨寺の可能性が高い。主人公の相伴赤麻呂は多磨郡の大領であり、私に寺院を建立できるほどの有力豪族だった。郡名寺院が郡司層により建立されたことは『日本霊異記』にはかの例もあり、多磨寺と考えられる京所廃寺は相伴赤麻呂が建立した氏寺であった可能性がある。また、京所地域に国衙の曹司群が所在したと考えら

れることから郡名寺院である多磨寺は国府に近接し、郡名寺院は郡衙付近に設けられる例が多いことから郡衙もこの近辺に設置され、大領である大伴赤麻呂もまたこの付近、すなわち多磨郡の中心部に居住したのであろう。

⑧下巻第七縁、武蔵国多磨郡小河郷は小川の地名が残る現在の東京都あきる野市に比定されている。小河郷は国府からは直線距離でおよそ二十里も離れている。けれども、多磨川に面しているので、舟を使えば国府は案外近かったのかもしれない。多磨郡少領が居住する重要な地であった。

東海道の八話のうち三話は同じ武蔵国多磨郡を舞台にしているの併せて一つとして六話とすると、三話の舞台である郡内に国府が所在している。東海道は武蔵国多磨郡ではかすめるように通っているに過ぎないが、東山道時代は上野国からの官道が通り、所属替え以後は東海道からの国府連絡道があったので実質的にはそれほど距離があるとは感じられない。他の五話の地はすべて東海道が郡内を通っている。武蔵国多磨郡三話の地がすべて多磨川に面していることは古代交通を考える上で示唆されるものがある。

(二)東山道

東山道に属する国に伝承された七話の舞台は次のとおりである。武蔵国を除いたのは前述のとおり理由による。

①下巻第二十四縁の近江国野州郡御上領は今の滋賀県野洲郡野洲町の三上山にあたる。その三上山に神社があり陀我大神を祀っているという。現在も御上神社があるが、同県犬上郡の多賀大社との関係は不明である。郡内を東山道が通り、篠原駅があった。近

江国府は西に隣接する栗太郡に所在した。東山道が近江国に入るルートとしては、逢坂山經由で勢田川を渡る経路か、宇治田原から近江に入る「田原道」ルートか、いまだに定説はない。しかし、二〇〇六年十月、大津市関津遺跡で七官道を大きく上回る路面幅一五メートルの道路跡が検出され、八世紀初めから中ごろに建設された遺構とされる。これが「田原道」だとすると平城京―近江国府直近ルートが有力になってくる。国府より東にある本説話の舞台はいずれのルートをとっても通過する地点である。

②下巻第八縁の近江国坂田郡遠江里は現在の滋賀県坂田郡にあたるが遠江里については未詳である。郡内を東山道が通っており、天平十二年（七四〇）十二月、聖武天皇は不破頓宮を發って近江国横川の頓宮に到っている。横川駅は美濃国との国境に近い米原町醒井付近あるいは山東町梓河内に所在したと推定されている。

③上巻第二縁の三乃国大乃郡は岐阜県揖斐郡大野町あたりとされる。国府の所在する不破郡に隣接し、郡内を東山道が通って不破駅の次の駅である大野駅が所在した。説話は乃郡の人が狐を妻として子を生まれ、狐直の姓を負うことになった美濃の狐の先祖説話である。次にあげる説話④と関連している。

④中巻第四縁の三乃国片郡小川市は岐阜県岐阜市にあたるが、小川市は未詳とされる。ただし、説話下文に尾張国愛智郡片輪里の女（上巻第三縁・中巻第二十七縁に登場する大力の女と同一人物）が舟に蛤を積んで来るところから、長良川に面して市が存在していたと考えられている。片輪里から長良川までの経路にやや無理もあるが、国境を越えて舟運を利用した交易が行われていたこと

は十分考えられ、小川市は美濃国内における交易・物流の重要地点とすることができよう。東山道方県駅は岐阜市長良の城之内遺跡が駅跡として有力視されており、そこから飛騨国へ向かう国府連絡路が分かれている交通の要衝である。また、「御野国肩野郡肩々里戸籍」の地であり、御野国戸籍中最大郷戸の戸主である国造大庭、その二男で国分寺に私稲二万束を献納し外従五位下を叙位された方県郡少領雄万の居住した地であった。

⑤下巻第三十一縁の美乃国方県郡水野郷楠見村は現在の岐阜県岐阜市にあたる。水野郷は『和名類聚抄』に記載のない郷だが、岐阜市北部一帯に比定されている。前項④と同じなので、以下は省略する。

⑥下巻第二十二縁の信濃国小県郡跡目里は『和名類聚抄』にみえる「跡部郷」と考えられ、現在の長野県上田市・青木村に比定されている。郷内を東山道が通り、近くに浦野駅が所在し、保福寺峠を挟んで錦織駅とともに十五頭の馬が配置されていた。小県郡は国府（八世紀末に筑摩郡に移転するまで）・国分寺が所在する郡であった。国府跡はまだ確定されていないが、国分寺からそう遠くない場所と考えられている。

⑦下巻第二十三縁の信濃国小県郡嬢里は『和名類聚抄』には「童女郷」と見え、今の長野県上田市・東御市にあたる。前項⑤と同じ郡に所在するが、跡目里とは国府・国分寺を挟んだ反対側になる。郡内に浦野・日理の二駅が所在する。

以上、東山道の説話舞台についてまとめると次のとおりである。説話舞台のすべての郡を東山道が通過しており、すべてに駅が置か

れていた。二話（同一郡だが）の舞台郡には国府・国分寺が所在している。④小川市のように、国境を越えて交易が行われたと考えられる交易・物流の重要地点もある。

（三）北陸道

北陸道を舞台にする説話は越前国加賀郡の二話のみである。

①下巻第十四縁の越前国加賀郡は現在の石川県河北郡・金沢市・松任市・石川市にあたる。加賀郡は江沼郡とともに平安時代の初期に独立して加賀国になるまで越前国に属していた。説話の時代には郡内に北陸道三駅、能登路一駅が存在し、そのうちの深見駅は北陸道と能登路の分岐点であった。河北湖が外海とつながっていた時代には海運も行われていたとの指摘がある。深見駅跡か能登路の横川駅への途中と考えられる加茂遺跡からは嘉祥二年（八四九）銘の著名な勝示札が出土している。加賀郡から発せられた禁制札で、官道の傍らに掲示して取り締まるためのものだが、どこに立ててもよいというものではないので、これが立てられた場所は重要地点だったのであろう。

②下巻第十六縁の舞台越前国加賀郡は前項①と同じであるので省略する。

加賀国は奈良時代は越前国に所管されていた。越前国府は丹生郡にあり、加賀郡からは距離がある。しかし、加賀郡は郡内に駅を四つもち、深見駅は北陸道と能登路の分岐点にあたる重要な駅だった。河北湖を利用した舟運の指摘も重要である。

（四）山陰道

山陰道では次の一話のみが伝えられた。都に比較的近いところが

舞台で、遠い地方の話はまったくない。

①上巻第九縁、但馬国七美郡山里は今の兵庫県美方郡美方町・村岡町に比定される。現在の美方郡は七美郡と北西に隣接する二方郡が合併して生まれた。郡内を山陰道が貫通し、山前・射添駅の二駅が所在する。ただし、山前駅を山陰道本路に置くことについては異論がある。当時の但馬国府は出石郡出石町にあり、七美郡からは相当な距離があるが、七美郡内から但馬国府を経て丹後国を結ぶ但馬丹後路が出ていたとされる。この説話にはもう一つの地名、丹波後国加佐郡が登場するが、これは現在の京都府舞鶴市・加佐郡大江町にあたる。他国ではあるが、但馬国府が所在した出石からは程近い。但馬丹後路をとれば比較的短時間で行き来できた距離である。

この説話の舞台も官道が通っている。JR山陰線は大きく迂回しているが、近世山陰道も旧一級国道9号線も山陰道と付かず離れず通っており、この路線が昔も今も山陰方面への重要な経路であることが分かる。

(五) 山陽道

山陽道の五話に登場する説話舞台は次のとおりである。

①上巻第十一縁の舞台である播磨国飾磨郡は現在の兵庫県姫路市とその周辺に当たるが、この郡にはかつて播磨国の国府が所在し、その南に隣接して美作路との分岐点である草上駅があった。山陽道にとっても播磨国にとっても重要地点であったといえる。説話に登場する濃於寺については未詳である。

②下巻第十三縁の美作国英多郡は今の岡山県英田郡で、山陽道の支

路である美作路が通っていた。主人公は鉄山の役夫であり特別な人ではない。ただ、この説話で重要なことは、この郡内に「官の鉄を取る山」があつて、多くの役夫が坑道に入つて鉄鉱石を掘っていた事実である。美作地方は古くから鉄の産出地として知られており、美作国は調として鉄を納めていることから、かなり大掛かりと考えられる鉄鉱山のある英多郡は中央にとつて重要な地であつたといえよう。

③上巻第二十九縁の備中国少田郡は岡山県小田郡および笠岡市に当たる。この郡には小田駅が所在し、三棟の掘立柱建物址と「馬」字の線刻土師器が出土した矢掛町浅海毎戸の毎戸遺跡が駅址に比定されている。説話主人公の白髪部猪丸はほかに登場しない未詳の人物である。この地は吉備真備ゆかりの地であり、笠臣あるいは吉備氏を通じて中央と結びつきの強い地であつた。

④下巻第二十七縁の備後国鞆田郡は、現在の広島県芦品郡および福山市・府中市あたりとされている。山陽道が郡域の南部を通り、備後国府が府中市に所在し、仮称鞆田駅がその南西近くに所在したと考えられている。説話に登場する同郡大山里と窟穴国郷については未詳である。主人公の一人穴君の弟公は伯父とともに正月のものを買うために馬・布・綿・塩をもって同国深津郡深津市に行く。現在の福山市である。途中で弟公は伯父に殺され、伯父は馬を讃岐国の人に売る。国府には国府市が設置されていたと考えられるが、海に面した深津市の方が規模が大きく交易に都合よかったのであろう。それに、讃岐国の人と取引しているように、交易圏もまた広がったのである。

⑤上巻第七縁の舞台、備後国三谷郡は今の広島県三次市である。広島県の内陸部で、山陽道からも国府からも遠く離れている。大領の先祖が禅師を伴って百済より帰国し、私に寺を造ろうというのであるから、大領の先祖の富裕の程を推して知ることができる。僻遠の地ではあっても、有力土豪が仏教文化を積極的に取り入れようとしている地であった。

このようにみると、山陽道五話のうち四話の舞台を山陽道が通っている。そのうちの二話は国府が所在する郡で伝承されてきた。また、深津市のように相当規模の大きい市が存在しており、人物・情報が集まる市は説話の伝達にかかわりがありそうである。⑤の弘濟禪師は都からの岐路を難波津からの海路をとっている。往路も同様だったとも考えられ、水上交通の利便性が等閑視できないことが知られる。

(六) 南海道

南海道には六話がある。紀伊国は前述の理由で除いた。

①下巻第二十縁、粟国名方郡植村は現在の徳島県名西郡石井町あたりで、吉野川がつくった徳島平野の一面を成している。国府までは10〜15里と近接している。南海道は紀伊国から淡路国・阿波国に渡り、讃岐・伊予国に到る路線で、阿波国内は北東部の板野郡を通過するのみで、名方郡に置かれた国府への連絡路が開かれていた。しかし、平城京跡から那賀郡内にあったとみられる二駅名を示す木簡が出土していることから、土佐国への陸路の想定もされている。もしそうだとすると、土佐国への路線は名方郡を通ることになる。もう一つ登場する粟国麻殖郡は名方郡の西に隣接し、

吉野川北側に位置する。

②下巻第二十六縁の讃岐国美貴郡は現在の香川県木田郡にあたる。讃岐国は全十一郡がすべて瀬戸内海に面し、全郡を南海道がみごとに通過している。美貴郡には駅は所在しない。国府は阿野郡に置かれ、現在の坂出市にあたる。

③中巻二十五縁の讃岐国山田郡は現在の香川県高松市にあたる。山田郡内に三谿駅が所在し、高松市三谷町が比定されている。もう一つ登場する同国鵜垂郡は現在の丸亀市にあたり、郡内に駅は設置されていないが、国府のある阿野郡に隣接している。

④中巻十六縁の讃岐国香川郡坂田里は今の香川県高松市にあたる。郡内に駅は置かれていないが、後に県名となる郡名をもつこの地域は讃岐国でも重要な地であったのであろう。

⑤上巻第十七縁、伊予国越知郡は愛媛県越智郡および今治市にあたる。伊予国では国府が所在した越智郡まで讃岐国と同様に瀬戸内海に面した郡をすべて南海道が貫通している。この説話舞台の越智郡には国府とその近くに越智駅が設置されていた。またこの地は、現在しまなみ海道で本州と結ばれているように、備後・安芸には島伝いに簡単に行け、瀬戸内海を利用する船運に至便な地であった。

⑥上巻第十八縁の伊予国別郡は現在の愛媛県松山市・温泉郡にあたる。『延喜式』の南海道は越智郡越智駅で終わっているが、さらにその先に伸びる条里余剰帯の状態から、伊予国の中部・南西部を構成する郡に到る道があり、それはまた、土佐国に向かう路線でもあったと考えられている。

以上、南海道の六話の舞台についてまとめてみた。阿波国と伊予国の一話⑥は官道の通らない郡を舞台にしているが、讃岐国の三話と伊予国の一話⑤は官道の通る郡を舞台にしており、⑤は国府と駅が所在する郡である。山陽道の④では讃岐国の人と交易していることが見られるので、官道のほかに海上の交通・交易が盛んに行われていたことが想定される。

(七) 西海道

西海道には国を別にして三話がある。ただし、③は説話の舞台が二カ所あるのでそれもあげた。

①上巻第三十縁の豊前国宮子郡は現在の福岡県京都郡・行橋市にあたる。豊前国は官道が複雑に通っている。まず、長門国から豊前国企救郡に渡り国内最北部を通って大宰府を目指す西海道本道、大宰府から豊前国内を貫通して豊後国府に到る西海道豊前路、その二路線を結ぶ西海道東路である。国府は豊前路の中津郡に所在し、現在は京都郡豊津町にあたる。宮子郡には東路の刈田駅と豊前路の多米駅の二駅があった。とくに多米駅は東路と豊前路の分岐点という重要な地点にあたっていた。

②下巻第三十五縁、肥前国松浦郡は佐賀県の東松浦半島から長崎県の北松浦半島にかけての肥前国北西部を占める広い地域にあたる。『延喜式』所載の駅は十五あり、松浦郡内には五駅ある。しかし、説話の時代にどのようなであったのかはまだ不明の部分が多い。

③下巻第十九縁の肥後国八代郡豊服郷は現在の熊本県下益城郡松橋町豊福にあたる。肥後国内の官道は基本的には北から南に有明海・不知火海に沿って走り大隈・薩摩国に向かう路線であり、途中か

ら豊後国に向かう連絡路を派生している。律令初期の路線も延喜式の駅路と基本的に同一で、南九州統一のための軍事的な目的をもって敷設されたものを継承したと考えられている。豊服郷に比定される松橋町豊福はまた豊向駅が所在したとされており、重要な地であった。説話主人公の尼が訪ねた肥前国佐賀郡は国府の所在地で肥前国の中心地であった。

以上の西海道三話の四つの地では①の肥前国松浦郡のみ不明な点が多いが、いずれも官道が通り、国府あるいは駅が所在する郡であり、国内でも交通上ばかりでなく政治・経済の面でも重要な地であったことが分かる。

二 説話舞台の地理的歴史的共通点

畿内と紀伊国を除く七道ごとに説話の舞台となった地について特徴と思われる点を列举してきたが、それらをまとめて共通する点をあげると次のとおりである。三十二話のうち武蔵国多磨郡三話のように同一郡の場合は一つとし、一話の中に舞台が二カ所以上登場する場合はそれぞれ数えた。そうすると、説話の舞台は合計三十二になる。

◎説話舞台が所在する郡の中を

・ 官道が通っている例	二四 (七五、〇%)
・ 駅が所在する例	二〇 (六二、五%)
・ 駅が所在しない例	四 (一二、五%)
・ 国府・国分寺が所在する例	九 (二八、一%)
・ 官道、国府・国分寺、駅が所在する例	七 (二一、九%)
・ 市が所在する例	二 (六、三%)

『日本霊異記』説話の舞台は、感覚的に政治・経済・文化の中心地とされることが多かったが、国府・国分寺が所在するのは三分の一以下で、想定されてきた割合より低いといえよう。一方、官道が通っている例が四分の三、駅が所在する例が約三分の二と高い割合を示し、官道・駅がない場合のほうがむしろ例外的であるといえよう。国府・国分寺が所在する郡は例外なく官道が通り、駅も設置されているので、官道・国府・国分寺、駅がセットで所在すると最も強力な第一次伝承舞台となりうる。説話の時代に人・物・情報が集中するのは、その国や郡の交通の要衝であり中心地だった国府・国分寺・駅・市など限られた場所であったと考えられる。畿外の地方の説話伝承舞台は、そのような地である場合が圧倒的に多かったといえよう。

Ⅱ 説話主人公の共通性

畿外の地方を舞台とする説話に登場する主人公はどのような階層に属するのだろうか。そこに何らかの共通性が存在しないか検証してみたい。

(一) 郡領

大領、大領の先祖、大領の妻、少領が主人公の例が七例で、それを整理すると次のとおりである。

- ・ 上巻七 大領の先祖
- ・ 同 十七 大領の先祖
- ・ 同 三十 少領
- ・ 中巻九 大領

- ・ 同 二十七 大領の妻
- ・ 下巻七 少領
- ・ 同 二十六 大領の妻

大領の先祖が二例あるが、郡領はもちろん郡司は基本的に譜代制なので、その先祖も子孫が大領になって当然の在地の豪族であったといえよう。この割合は二一・九%で、登場人物の五人に一人以上はこの階層に属している。なお、中巻四の力女は中巻二十七の大領の妻と同一人物であり、下巻二十六の田中真人広虫女の夫は大領なので、これをも含めるとその割合はさらに高くなる。

(二) 伝統的名族

- ・ 中巻三 吉志火麻呂
- ・ 同 三十一 丹生直弟上
- ・ 下巻二十二 他田舎人蝦夷
- ・ 同 三十五 火君の氏

吉志氏は多摩郡や同じ武蔵国内男衾郡の郡司に壬生吉志氏が見え、母親の日下部氏は横見郡司にも存在が知られる氏なので、吉志氏も日下部氏も一般庶民ではなく在地の有力豪族だろうとされる。他田舎人氏は科野国造に他田舎人直氏があり、小県郡に本拠を置いたという説もあるので、それに連なる人物と考えられる。財宝豊かで銭・稲の出挙を行っていたように富裕階層であった。火君はすなわち肥君で、名高い肥君猪手が思い浮かばれるが、この主人公は文字を書ける人であり、有力氏族階層に属する人物といえよう。丹生直弟上は姓に直を持つので国造一族と考えられるが、七重塔の建立を発願するものの老年に及ぶまで実現できなかったとあり、名

族出ではあつてもさほど富裕ではなかったと思われる。天平十九年（七四七）には諸国百姓の造塔を許す勅が出されており、同様の発願は少なくなかったであろう。

(三) 富裕層

- ・ 上巻二 美濃国狐直の祖 稻舂女を雇用している
- ・ 上巻十八 日下猴 召使の女を持ち堂も持つ
- ・ 中巻十五 高橋連東人 大いに富んで財豊か
- ・ 同 十六 綾君 富める人
- ・ 同 二十五 布敷臣衣女 疫神に賂い饗す
- ・ 下巻八 富める人
- ・ 同 十四 小野朝臣庭磨 浮浪人を私的に使役
- ・ 同 二十三 大伴連忍勝 一族で氏寺を建立
- ・ 同 二十七 穴君弟公 馬・布・綿・塩を市に売りに行く

く

「財豊か」「富める人」と表現されているのは三人のみだが、そのほかの記述から富裕層とできる例が五人ある。朝臣・連・臣の姓をもつものがあるが、その土地に新たに土着し勢力を伸ばし始めた新興層であろう。穴君弟公は実際に市に行く前に殺害されてしまうが、これだけのものをもって交易のため市に出かけているので、ここにあげた。その父も財豊かである。これらの富裕層が全体に占める割合は二八・一％となる。(一)、(二)にも富裕層がいるので、富裕なもの割合はもっと高い。

(四) 伝統的名族あるいは富裕層と考えられるもの

- ・ 下巻十六 豊服広公の娘

- ・ 同 二十 忌部首多夜須子 写経をする
- ・ 同 三十一 県氏

豊服氏は居住する郷の名が豊福郷で、郷名を氏名に負うところから伝統的名族といえるだろう。忌部氏は祭祀を掌る旧族で壬申の乱で活躍するなど中央を活動の場とするものと、阿波国を本貫地とするものがある。阿波の忌部氏には首・連・宿祢を姓とするものがある。県氏は御野国の戸籍に多数みられる「県造」「県主」氏と関連する氏と考えられ、美濃国では伝統のある一族と思われる。ただし、大多数の県氏は一般の戸であるので富裕層であるとはいえない。

(五) その他

上記の(一)～(四)に含まれないものが山里の人・農夫・漁夫・僧・鉾山の役夫など九人がある。横江臣成刀自女は臣姓だが内容は不明である。

このようにみると、(一)～(四)で合計二十三人、七一・九％になる。説話の登場人物は、その可能性の高いものまで含めて多くが郡領・富裕層・伝統的名族ということになる。火君は文字が書け、自分の体験を記録して文書にし解文として大宰府に提出している。忌部首多夜須子も写経しているように文字が書ける。郡領が文字の読み書きができるのは当然である。地方居住とはいえ有力者やその妻などは相当の知識人であったと考えられ、説話の口承・書承に大きく与っていたといえよう。このような階層の人物がいなければ説話の第一次伝承はなされなかったといっても過言ではないだろう。

Ⅲ 説話の伝達

上述のように、畿外の地方を舞台とする『日本霊異記』の説話は、政治・経済の中心地である国府・国分寺が所在する郡、官道が通り駅が所在する交通の要衝が舞台であり、説話の主人公は一般庶民ではない在地の豪族・富裕層・有力者である場合が高いことを確認できた。

それでは、第一次伝承の地から景戒の許へは誰がどのように運んだのだろうか。

一 官人、税の運脚夫、防人・衛士など

まず、国司・郡司などの官人を上げることができる。とくに国司たちは任地へ赴任し、任果てると京へ帰る。また、任期中にさまざまな使いとして任地と京を何度も往復する。都人士にとって興味深い地方の伝承を都へ伝えた可能性は高いだろう。

次に税の運搬に従事した一般農民が伝達した可能性もある。税は都からの遠近によって治める期限が定められていた。長い道のりを、重い荷を負い、馬を駆り立て、ひたすら税を運ぶ彼らの路次の楽しみに伝承を語り合うことがあったかもしれない。しかし、往復の糧食に事欠き、帰路に倒れる例も多かったというので、そのような余裕はなかったともいえる。

防人・衛士などの兵士にも説話伝達者の可能性はあろう。ただし、防人は九州北部の守りに赴くので、都の景戒に伝わる機会は多くはなかったと思われる。

二 僧侶

この場合、とくに国分寺僧が想定される。上巻第十一縁、下巻第

十九縁にみられるように、地方寺院や豪族が行った法会に中央寺院の僧侶が招かれており、このような例は結構多かったと考えられている。その際に、説話の原型になるモチーフがもたらされ、それに地域事情が加えられた地域説話が形成されたとの考えもある。しかし、地方を舞台とする説話の多くが国府・国分寺が所在する郡内であることが多いことから、たまさかに中央から招かれる僧より、国分寺僧が布教のために行う説法の道具として因果応報譚が語られ、第一次伝承が始まるほうが多かったであろう。天平十九年(七四七)、諸国の沙弥尼らの受戒のための入京を禁止しているが、これは禁止しなければならぬほど入京が多かったということで、仏像・仏具・經典・法衣などの入手のために一般の僧尼はさらに活発に寺と京とを往復していたと考えられる。

三 商旅の徒、交易従事者

(一) 水運交易

中巻第二十四縁の主人公檣磐嶋は、大安寺の修多羅錢三十貫を借りてこれを元手とし、越前国敦賀の津に行つて品々を買ひ込んで琵琶湖の塩津で船に載せた。京までは琵琶湖・勢田川・宇治川・巨椋池・木津川と水上輸送ができ、陸路をとるより早く運べたのである。琵琶湖の湖上輸送はごく一般的だったと考えられる。檣磐嶋は平城京の住人であるが、このようにやや距離のあるところまで出かけて交易をしており、専門商人的な商旅の徒ということが出来る人物だが、このような人物はほかにも大勢いたのであろう。たとえば、古くは欽明天皇の世、山背国深草里に秦大津父という人が住んでいて伊勢国との間を行き来して商賈(商売)を行っていたという。また、

天平八年（七四六）七月二十一日の太政官符が「官人百姓商旅之徒が豊前国草野津や豊後国国埼・坂門津から意に任せて往還し、国物を漕運することを禁止」しているように、瀬戸内海を航行して北部九州と難波を結び、かなり大規模な交易を行っている者がいた。この中には「商旅の徒」と呼ばれる專業交易者のほか官人百姓も交易者として含まれていて、中央・地方の有力者による積極的な交易がみられる。

下巻第二十七縁には備後国の深津の市で讃岐国の人に馬を売ったとある。距離的にはさほど遠くはないものの、備後と讃岐の間には瀬戸内海があり、馬を載せて海を渡れるほどの船を用いての交易が行われていたことがわかる。上巻第七縁の弘濟禪師は都からの復路を海路をとり（往路も同じと思われる）、六人の舟人が操船する結構な規模の船を雇っている。筑前国から船に乗って都に上る話（下―三十七）もある。これよりずっと前、天武天皇十四年（六八五）、防人は難波津より船で筑紫まで運ばれているし、天平勝宝八歳（七五六）には、山陽・南海諸国の春米は船で運ぶよう太政官処分が下されえいることをみても、瀬戸内航路はかなり発達していた。天平神護元年（七六五）、平城京の米価高騰により西海道諸国から私米の京での販売を目的とした運漕が認められている。難波津には市があり（上―三十五）、貴族や大寺院などが近くに蔵を持っていたようで、瀬戸内水運を利用しての交易が広く行われていたことが知れる。

中巻第四縁には尾張国愛智郡片輪の里から美濃国片貝郡小川市まで五十石の蛤を船で運ぶ段がある。五十石は米の量ならば一二五俵

になる。話とはいいいながら五十石に違和感を感じないほどかなりの規模の船が上下していたのであろう。中巻第二十七縁には、尾張国の草津川の船着場付近を商人が大きな船に荷物を載せて通りかかる話がある。この場合、目的地（あるいは出発地）は美濃国小川市のような内陸の市で、河川水運が発達して交易が活発に行われていたことをうかがわせる。

下巻第四縁には陸奥国に行くのに官人が船を利用する話がある。貨物船を利用したのであろう。乗降の津については不明であるが、太平洋を航行する航路も確立されていたと思われる。宝龜七年（七七六）、安房・上総・下総・常陸の四国の船五十隻を民間から買い上げ陸奥国に配備して不虞に備えさせたとあるように、民間に相当数の船があったことがわかるが、これらの船は郡司などの地方豪族が所有していた構造船であろうと考えられ、これらが私的な交易のために用いられていたであろうことは想像に難くない。

『日本後紀』延暦十八年（七九九）五月条にみえる隠岐国智夫郡の比奈良麻治比売神の靈驗譚にみられるように、日本海を航行する「商賈の輩」も多かった。また、和銅二年（七〇九）に越前・越中・越後・佐渡国の船一〇〇艘を征狄所に送らせているが、これらの船のすべてが諸国の所有するところではなく、安房などで買い上げたように在地の有力者のものも多かったのではなかろうか。もしそうであれば、日本海沿岸での私的な交易が想定される。

（二）陸上交易

『日本靈異記』には陸上での交易について想定させるような話はあまり多くない。馬に背負い切れないほどの瓜を負わせて、これを

売るもの（上―二十一）、吉野山の山寺から紀伊国の海岸に行き魚を買う話（下―六）、備後国鞆郡大山里から深津郡深津市に正月用のものを買いに行く話（下―二十七）などがあげられるにすぎない。しかし、輸送・交易に関する説話がみられないだけで、実際には水上輸送より陸上輸送のほうが多かったはずで、国府市や河川に面した内陸の津などもあり、人と物資の集まる場所では盛んに交易が行われていたと思われる。

天平六年（七三四）、勅して東海・東山・山陰道の諸国に牛馬を国境を越えて売り買いすることを許している。これは、同四年（七三二）の節度使任命に伴う武器・牛馬の保全を目的にした詔の解除に当たるが、詔以前も勅以後も、地方の有力者が私有する牛馬を国境を越える広範囲で売買していたこと、すなわち大規模な交易を行っていたことを示している。時代はやや下るが、弘仁六年（八一五）、勅して「権貴の家、富豪の輩が使いを辺邑に派遣して夷狄から馬を求めるため、国家の兵馬が不足しているので、陸奥・出羽両国の馬を買うことを禁じ」ているように、大掛かり・広範囲の馬の交易が行われていた。

畿内のような平城京の近国では車による輸送も行われていた。古墳からの車輪の出土、平城京やその周辺道路上の轍跡の検出などから車輸送の存在は確実である。年代は下るが、貞観一〇年（八六八）三月一〇日の太政官符に「賃車之徒」がみられ、雇われて車輸送する人々がいたことも確かで、少しさかのぼる説話の時代にも十分考えられることである。上巻第七縁の船を雇う話と同様に、陸上でも後世の馬借・車借に相当する馬・車を使つての運送専門業者が普通

に活動していたと思われる。壬申の乱に際して、「湯沐の米を運ぶ駄五十匹」がみられるが、交易者たちは多くの馬や車を雇いキャラバン隊のように隊列をなして交易物資を運んだのであろう。

四 説話伝達者の想定

説話を京の景戒の許に運んだ人物としては様ざまな者が考えられる。その中でも「商旅の徒」と呼ばれる交易を専業とするものや「賃車之徒」と称される運送専門業者およびそれに雇用されて輸送の実際に携わっていた者たちが考えられる。彼らが運んだ交易物資は一般の農民が売り買いたものではなく、地方の郡領層などの富裕層・有力者が蓄財した物資である。それらは官道が通る郡、国府・国分寺がある郡、市の存在する郡などから運ばれたはずで、説話もまたそのような郡に集中することから、交易物資とともに説話も彼らによつて運ばれたと考えられるのである。

おわりに

『日本霊異記』説話全一一六のうちから畿外地方を舞台にする説話三二話について、その舞台と登場主人公の特徴と共通点から、その説話が誰によつて平城京薬師寺の景戒の許にもたらされたのかを考えてみた。しかしそれは、説話そのものが史実をどれほど含んでいるのかさえ不明である上に、状況証拠を集めて構築しただけの考えにすぎないとの誇りの砲火を浴びそうである。けれども、国府・国分寺が所在し官道が通っている政治・経済・文化の中心地だったからというような感覚的な考えは説話伝達の実際を究明するのには役立たないと思われる。説話は鳥のように空を飛んで京へ行ったので

はない。それを持ち運んだ者が必ず存在したはずである。

本貫地主義の時代で一般公民の自由な往来が厳しく制限されていた中、遠隔地との間を往還可能だった者として、官人や公の仕事に従事して地元と都を往還した運脚の夫、国分寺・尼寺をはじめ郡名寺院などの僧尼などをまずあげられる。説話伝達者としては、仏教説話であることから一般の僧尼や唱導僧を想定することが多かった。わずかではあるが書承の例もある。けれども、より自由にしばしば往来していた者として「商旅の徒」などの「商人」と「賃車之徒」と呼ばれる運送専門業者、権貴の家・富豪の輩が交易のために派遣した使い、およびその仕事に従事する多くの人夫・舟人たちがあつた。説話舞台と「商旅の徒」などの交易従事者が集まる場所は共通点が多く、説話の主人公の層はまた交易の相手でもあつた。そうしてみると彼らによって説話の第一次伝承地から京へ運ばれた可能性はきわめて高いといえるであろう。

小論では説話舞台の特徴抽出に紙幅を費やしすぎてしまった。そのため、説話伝達者に関する「状況証拠」はきわめて乏しいものである。今後はさらにさまざまな面から証拠固めを試み、考えを補強したいと考えている。

参考文献

- ・ 日本古典文学全集『日本靈異記』小学館、1995
- ・ 新日本古典文学大系『日本靈異記』岩波書店、1996

- ・ 新日本古典文学大系『続日本紀』岩波書店、1989～98
- ・ 田名網宏『古代の交通』吉川弘文館、1969
- ・ 石母田正『日本の古代国家』岩波書店、1971
- ・ 池邊彌『和名類聚抄郡里驛名考證』吉川弘文館、1971
- ・ 加藤友康『日本古代における輸送に関する一試論』（原始古代社会研究会編『原始古代社会研究 5』校倉書房）1979
- ・ 和田萃「市・女・チマタ」（森浩一編『日本の古代 12 女性の力』中央公論社）1987
- ・ 森田悌『日本古代の政治と地方』高科書店、1988
- ・ 黒坂周平『東山道の実証的研究』吉川弘文館、1990
- ・ 一志茂樹『古代東山道の研究』信毎書籍出版センター、1991
- ・ 栄原永遠男『奈良時代流通経済史の研究』塙書房、1992
- ・ 森明彦「日本古代の市について―「古本令私記」C断簡小考―」（続日本紀研究会編『続日本紀の時代』塙書房）1994
- ・ 木下良「古代の交通体系」（『岩波講座 日本通史 第5巻 古代4』岩波書店）1995
- ・ 高橋美久二『古代交通の考古地理』大明堂、1995
- ・ 高橋美久二「律令制支配と交通体系の整備」（大塚初重ほか編『考古学による日本歴史 9 交易と交通』雄山閣出版）1997
- ・ 宇野隆夫「律令制下の交易」（大塚初重ほか編『考古学による日本歴史 9 交易と交通』雄山閣出版）1997
- ・ 田中琢・金関恕編『古代史の論点 3 都市と工業と流通』小学館、1998

- ・館野和己『日本古代の交通と社会』塙書房、1998
- ・川尻秋生「古代東国における交通の特質―東海道・東山道利用の実態―」（古代交通研究会編『古代交通研究』第十一号、八木書店）2002
- ・川尻秋生『古代東国史の基礎的研究』塙書房、2003
- ・古代交通研究会編『日本古代道路事典』八木書店、2004
- ・松原弘宣「琵琶湖の湖上交通について」（続日本紀研究会編『続日本紀の諸相』塙書房）2004
- ・三舟隆之「『日本靈異記』における東国関係説話―説話形成の一試論―」（小峯和明・篠川賢編『日本靈異記を読む』吉川弘文館）2004
- ・武部健一『完全踏破 古代の道』吉川弘文館、2004
- ・武部健一『完全踏破 続古代の道』吉川弘文館、2005
- ・長野県文化財保護協会編『信濃の東山道』長野県文化財保護協会、2005
- ・松原弘宣「河海の交通―日本海交通を中心として」（『列島の古代史―ひと・もの・こと 4 人と物の移動』岩波書店）2005
- ・館野和己「市と交易―平城京東西市を中心に」（『列島の古代史―ひと・もの・こと 4 人と物の移動』岩波書店）2005
- ・加藤友康「貢納と運搬」（『列島の古代史―ひと・もの・こと 4 人と物の移動』岩波書店）2005
- ・吉田一彦『民衆の古代史―『日本靈異記』に見るもう一つの古代史』風媒社、2006